

## 短歌研究新人賞の混戦 佐佐木定綱

今年の短歌研究新人賞は小佐野彈の「無垢な日本で」だった。LGBTというテーマが貫かれた一連である。

・ぬばたまのソファに触れ合ふお互ひの決して細くはない骨と骨肌ではなく、骨が触れ合っている。お互い男だからか、ふたりとも細い骨ではない。骨盤あたりの骨も男女で違うので、骨になってもマジョリテイにはなれない悲哀がある。一緒に墓に入るのが難しいという問題も根底にはあるだろう。

・かげるふのやうにゆらりと飛びさうな続柄欄の「友人」の文字 社会的な視点である。LGBTの問題として結婚できないというものがある。結婚をしている状態とは社会にいろいろな権利が認められている状態でもある。別に結婚できなくても一緒にいればいいじゃん。と思うかもしれないが、そうでもない。ひとつの問題は相手が生命の危機に陥ったとき、家族でなければ手術などの同意書にサインができない。また、重篤な場合、家族でなければ面会も拒否されてしまう。社会保護の希薄さが続柄欄で歌われている。

・金色の信玄公は踏みつけるわたしを棄てた故郷の駅を  
・東京はやつぱりいいね人間が赤や黄色の羽根持つてゐて

田舎と都会の対比。田舎と都会では理解度が違い、同じ立場の人がいるかどうかもある。

丁寧に作られた一連で、好意的に読んだ。かなり抑圧された一連だと感じた。

・あさましきたましひ燃える胸のこと母には告げぬまま新宿へ  
・原罪と無縁の皮膚がしらじらと人魚のやうだ 異性愛者はここに籠められている感情は苛烈である。「あさましきたましひ」「原罪」ということはよほどのことがなければ出てこない

だろう。マジョリテイである自分とマジョリテイの世間との摩擦、故郷への愛憎、それは激しいものであると思う。だが、それらを押し殺し、理性的にまとめてある。個人的にはそれらがむき出しにされた歌が読みたい。

今年はずいぶんと混戦だったようだ。選後講評で「まったく作り方の違うもの同士の優劣を決めるという難しさ」があり、「絶対これだ」というものが「ここ数年の選考ではない」と穂村弘が語り、「ここ何年も揺らぎながら選んでいる」と米川千嘉子が言う。次席はおもしろいことに対照的な二作品だった。「ミクロコスモス」(野沢佳央理)はバスケットをプレイする就活生を虚構で歌い上げ、「拾いながらゆく」(戸田響子)は昭和の雰囲気があることばの組み合わせで、日常が不思議に歌われている。前者には明確な「私」像があり、ストーリーもある。後者は「私」もストーリーも明確には見えない。いつてみればさまざまジャンル作品がぶつかり合い、その混戦の中で今年はテーマの強い「無垢な日本」に軍配が上がった。

拡散と収斂は世の常で、この作風の違いは今後もさらに増えていくのだろう。萩原朔太郎は詩の美感を「にほひ」といった。知らない「にほひ」を感じる感覚を忘れてはならない。